# 彫刻家　内藤堯雄の基礎調査（1）
## —具象木彫表現における日本のかたちの研究—

# Basic research of sculptor Naito Takao
## —Research on Japanese stile in wood sculpture—

河　西　栄　二
KASAI Eiji

**キーワード：**　内藤堯雄，彫刻，木彫，新制作協会，日本のかたち

### Ⅰ-1　はじめに

筆者は，自身での具象木彫制作の研究と共に，欧州及び日本の木彫表現の研究にも取り組んでいる。

本研究はJSPS科研費20520107の助成を受け，「具象木彫表現における日本のかたちの研究」というテーマで，独特な表現世界を持つ日本の木彫作家六名，円空（えんくう1632－1695美濃国（岐阜)），木喰（もくじき1718－1810甲斐国(山梨)），新海竹蔵（しんかいたけぞう1897－1968山形），橋本平八（はしもとへいはち1897－1935三重），桜井祐一（さくらいゆういち1914－1981山形），内藤堯雄（ないとうたかお1925－1993福井）に焦点を当て，作品実見や資料収集を基に研究を進めている。

彼らの作品には，それぞれの精神性によるかたちの魅力があり，各時代の様式の模倣や他作家の影響を超えた，根源的な美としての日本特有のかたちの秘密があるように感じられる。

本研究は彼らの思想や作品（図１～６）の造形的検証を行いその中に潜む土着的，原始的な独自の美のありようを明らかにすることを目的としている。本稿は，その中の内藤堯雄の基礎調査についての報告である。

### Ⅰ-2　内藤堯雄について

内藤堯雄は，新制作協会彫刻部の会員であり，毎年秋に開催される新制作展や，大阪や福井での個展を中心に作品発表を行ってきた現代木彫作家である。内藤の作品は，実直でありながら豊かで力強く人を魅了するにも関わらず，作品リストや作品集の刊行が少なく，データの集約と公開が急がれる状況にあるといえる。

これは内藤だけの事ではなく，近現代の彫刻作家の多くがこのように歴史の中に埋もれつつあるのが現状であり，全国的な作品展示の機会や作品収蔵は限られた一握りの作家にすぎない。

本稿で作品リストや主要文献，年譜などの基礎資料を広く公開することが，こうした作家たちの再調査，再評価へつながることを期待している。

図１　円空
《十一面観音像、善女竜王、財善童子の三尊》
円空記念館

図２ 木喰
《日蓮上人》
木彫　30.8㎝
金龍寺
山梨県南巨摩郡身延町

図３ 新海竹蔵
《半跏の女》
1961年　木彫
着彩
104.5×58.5×55.0㎝

図４ 橋本平八
《石に就て》
1928木彫
28.6×18.2×19.6㎝

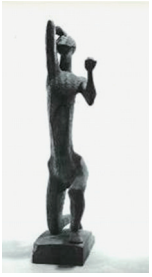


図５ 桜井祐一
《沈む地球》
1957木彫
161×37×62㎝

図６ 内藤堯雄
《刻まれた記憶》
1959　木彫(杉)
36×41×117㎝
福井県立美術館蔵

## Ⅱ　基礎調査・研究発表活動実施内容

2008年から2014年にかけて，№①～⑪の11回の内藤堯雄の基礎調査，及び⑫の研究発表活動に取り組んだ（表１）。それらは聞き取り調査，作品実見調査，資料収集など多岐にわたる。以下に概要を記す。

### ①番浦有爾氏聞き取り調査　2008年10月20日

内藤堯雄と懇意であった新制作協会会員の番浦有爾（ばんうらゆうじ1935－　京都）氏に内藤堯雄と関連のある美術館，画廊について聞き取り調査を行った。それにより大阪の画廊，山木美術で内藤堯雄，番浦有爾，加藤昭男（かとうあきお1927－　愛知）の３人展を過去に開催したこと，個展を開いた画廊が主に大阪の高宮画廊であること，内藤堯雄作品が福井県立美術館に収蔵されていることを知った。

表１　内藤堯雄　基礎調査実施内容一覧

| №. | 年月日 | 調査内容 | 収集内容 |
|---|---|---|---|
| ① | 2008<br>1020 | 番浦有爾氏聞き取り | 個展歴，画廊名 |
| ② | 2009<br>0104 | 福井県立美術館テーマ展<br>《立体　表現の多様性》<br>《デッサンと下絵》作品実見 | 作品スケッチ |
| ③ | 2009<br>0228 | 武生公民館《内藤堯雄の世界》展<br>作品実見調査 | 展覧会図録 |
| ④ | 2009<br>0403 | 大阪高宮画廊社長高宮剛一氏への聞き取り調査と作品実見，資料収集 | 作家情報，作品写真，新聞記事，DM |
| ⑤ | 2009<br>0618 | 福井県立美術館副館長<br>芹川貞夫氏への聞き取り調査 | 作家情報，作品写真，新聞記事。 |
| ⑥ | 同上 | 保管資料収集。<br>福井ギャラリー聞き取り<br>調査，資料収集。 | 作品写真，新聞記事，DMなど。 |
| ⑦ | 同上 | 個人コレクター作品調査 | 作品撮影，デッサン一覧。 |
| ⑧ | 同上 | 生家にて聞き取り調査，<br>資料収集。 | 作家情報，新聞記事，作品写真，道具，ｱﾄﾘｴの様子，所蔵書籍等 |
| ⑨ | 2013<br>0624 | 大阪高宮画廊訪問，作品寄贈を受ける。 | 木彫３点、ﾄﾞﾛｰｲﾝｸﾞ 40 点。 |
| ⑩ | 2013<br>1223 | 東京都現代美術館美術図書室にて新制作展の図録，目録調査 | 出品図録、目録の複写 |
| ⑪ | 2014<br>0228 | 国立国会図書館（東京）にて内藤堯雄関連の新聞記事複写 | 新聞記事複写 |
| ⑫ | 2014<br>1018 | 岐阜大学旧早野邸セミナーハウスにて内藤堯雄・河西栄二作品展開催 | 内藤作品の公開 |

### ②福井県立美術館作品調査　2009年１月４日

テーマ展「立体　表現の多様性」「デッサンと下絵」にてはじめて内藤堯雄の実物作品を見た。《刻まれた記憶》（図６）等の彫刻５点，ドローイング10点の実見調査，スケッチを行う。人体の再現とはかけ離れた斬新な形態，杉や柿などの彫刻材としてはあまり使われない樹種の使用，砥の粉と弁柄などによる独特の彩色等に衝撃を受けた。またこれに前後して展覧会図録「郷土の作家たち展」（福井県立美術館1992年）を入手した。

### ③越前市武生公民館公会堂作品実見調査　2009年２月28日

内藤堯雄没後15年の企画展「内藤堯雄の世界」にて彫刻26点（木彫22点，木彫レリーフ３点，石膏１点），ドローイング30点の実見調査を行い，展覧会図録を入手した。

### ④大阪　高宮画廊調査　2009年４月３日

社長高宮剛一氏への聞き取り調査と作品実見，資料収集を実施した。先代社長高宮秀閣氏が内藤堯雄の作品に魅力を感じ，1973年から1981年頃まで契約作家として，個展を開催してきたことが分かった。また内藤堯雄が影響を受けた作家や人柄などの聞き取りを行った。現在も高宮画廊で保有している木彫作品やドローイングの実見調査・写真撮影，新聞，DMなどの資料複写を実施した。

### ⑤福井県立美術館調査　2009年６月18日

副館長芹川貞夫氏へ，作家活動，作品，人柄等についての聞き取り調査と，新聞記事，作品写真，写真等保管資料の複写を行った。また芹沢氏には⑥⑦⑧の調査の引率，同行をして頂いた。

### ⑥福井県ギャラリー調査　2009年６月18日

アートハウスギャラリーGEBA髭分真二氏への聞き取り調査，資料収集を行った。アートハウスギャラリーは福井市内の画廊で1988年以降内藤堯雄の個展を開催している。新聞記事，展示風景写真等を収集した。

### ⑦福井市内個人所有作品調査　2009年６月18日

福井市にて個人所有の内藤堯雄作品の内，木彫５点の実見調査及び写真撮影を行った。また所有平面作品115点について画像データとリストを借用し複写した。

### ⑧生家にて聞き取り調査及び資料収集　2009年６月18日

奥様内藤千恵氏，長男了一氏への聞き取り調査，及び新聞記事，制作時や展覧会の写真や手紙等の資料を収集した。また当時使っていたア

トリエを実見し，道具や蔵書の調査を行った。多くの木彫のみの他に，自作したヤスリなど独自の表現技法に用いたと思われる道具を発見した。蔵書調査からは，ヘンリー・ムーアやイタリア彫刻の日本で初期の展覧会図録や木喰などの作品集を収集し，繰り返し開いて眺めたのではないかと推察された。書籍の痛みなどから当時関心を持っていた作家の傾向を見いだすことができた。

図７　生家取材にて
左から長男の了一氏，福井県美術館芹川氏、奥様千恵さん

**⑨大阪高宮画廊作品収集　2013年６月24日**

高宮画廊社長の高宮剛一氏より，内藤堯雄の木彫作品4点，平面作品36点，合計40点の作品を岐阜大学彫塑研究室に寄贈していただいた。木彫作品は，新制作展に出品した組作品の大作１点（図24）とレリーフの秀作３点（図93）（図95）である。平面作品は９点の円形の和紙に油彩で人物が描かれたもの(図79）や，墨の濃淡で描かれたもの，コンテなどの線描のものなど数種類の表現方法に分類できる。これらの実作品が手元にあることで，多角度から長期にわたり研究を行う事が可能となった。今後，これらの作品の研究を詳細に進め，その成果を公開して行きたい。

図8　高宮画廊にて
左から高宮画廊奥様、筆者、社長高宮剛一氏、同行院生

**⑩東京都現代美術館美術図書室資料収集**
**2013年12月23日**

内藤堯雄が主の作品発表とした公募団体，新制作協会の展覧会図録,目録の調査を行った。筆者も新制作協会会員である事から，すでに１年ほど前から新制作関連の図録や目録等の資料収集，調査，複写を進めてきた。東京都現代美術館での調査は，その補完として行ったものである。これらにより出品した作品の画像や題名を特定することができたものも多かったが，図書館に保管されてなかったり，図録があっても作品が掲載されていない年もあり，出品作品が特定できないものもあった。現在も新制作事務所と連携して過去の資料のアーカイブ化を進め，継続した調査を行っている段階である。新制作協会関連の調査結果については，今後別稿で発表したいと考えている。

**⑪東京国会図書室資料収集**
**2014年２月28日～３月１日**

内藤堯雄関連の新聞記事の検索，複写を行った。福井県立美術館や生家等で収集した新聞記事で掲載日が分からないものや，ニフティサーチ（G－サーチ），中日新聞・東京新聞記事データベースで検索し，文字情報だけ入手した新聞記事を，国会図書館のマイクロフィルムで検索・複写し，作品や展覧会風景画像等がレイアウトされた新聞記事を入手した。

**⑫研究発表活動，内藤堯雄の作品展示**
**2014年10月18日～11月８日**

研究発表活動として，寄贈を受けた内藤堯雄の作品を筆者の作品と共に岐阜大学旧早野邸セミナーハウスに展示し一般公開を行った。

以上，①～⑫の調査・研究では多くの関係者からの聞き取りにより，内藤堯雄の人物像や制作の基盤となる思想，影響を受けた作家，交友関係，画廊との関係など貴重な情報を収集することができた。また，多くの作品を実見する機会を得て，形態の魅力，木の扱い，着色方法などを把握することができた。さらに展覧会図録や案内，パンフレット，DM，など合計27点，新聞記事，作品写真や制作中の写真，内藤への手紙や賞状，画廊作成の作品リストなど数百点以上の資料を収集できた。

これらにより展覧会の名称，日程，会場などの詳しい展覧会情報，又作品の形態確認，出品歴，タイトル，サイズなどの作品情報を照合し，確認することができた。さらに複数の年譜の比較から正しい作家年譜情報を精査することができた。

次章ではこれらの資料等に基づきながら内藤堯雄の生い立ちついてまとめる。

## 表２　内藤堯雄　年譜

※展覧会図録「内藤堯雄の世界」（2009）を基に，展覧会案内や新聞記事，関係者聞き取りを参考に若干の追加記載や修正を行った。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1925 | 大正 14 | | 越前市京町（旧武生市有明町）に生まれる。　本名　内藤保次（ないとうやすじ）、雅号・堯雄（たかお） |
| 1937 | 昭和 12 | 12 歳 | 武生市南尋常小学校卒業。17 歳頃から仏像彫刻の道に入る。 |
| 1944 | 昭和 19 | 19 歳 | 大阪の美術展に《籠を持つ女》を初出品。初入選を果たす。 |
| 1945 | 昭和 20 | 20 歳 | 仏師であった父内藤雅雲より仏像彫刻を習得。彫刻家雨田光平に師事し近代彫刻に触れる。 |
| | | | 又この頃馬越祐一と知り合い大きな影響を受ける。 |
| 1949 頃 | 昭和 24 頃 | 24 歳頃 | 千恵と結婚。2 人で市営住宅に住み父雅雲の家に通い、仏像や欄間製作の仕事を続ける。 |
| ? | ? | ? | 長女　千津子（ちずこ）が生まれる。 |
| 1955 | 昭和 30 | 30 歳 | 長男　了一（りょういち）が生まれる。 |
| 1956 | 昭和 31 | 31 歳 | 第 20 回自由美術展（東京都美術館 10 月９日ー10 月26日）に《湖北の女》を出品。入選 |
| 1958 | 昭和 33 | 33 歳 | 第 22 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《或る女》《黒い首》の 2 点を初出品、入選 |
| 1959 | 昭和 34 | 34 歳 | 第 23 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《刻まれた記憶》出品。入選。新作家賞受賞。 |
| 1960 | 昭和 35 | 35 歳 | 第 24 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《象》出品。 |
| | | | 次の年から 1967（昭和42）年まで、一切の作品発表を控える。この頃、生みの親から家をもらい、市営住宅から移る。 |
| 1967 | 昭和 42 | 42 歳 | 第 31 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《嶺北にあった2つの自刻像》出品、入選 |
| 1968 | 昭和 43 | 43 歳 | 第 32 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《花かんざし》出品、入選 |
| 1969 | 昭和 44 | 44 歳 | 第 33 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《杉による作品》出品、新作家賞受賞 |
| 1970 | 昭和 45 | 45 歳 | 第 34 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《2駆》出品、新作家賞受賞 |
| 1971 | 昭和 46 | 46 歳 | 第 35 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《味真野》出品、新制作会員に推挙される。 |
| 1972 | 昭和 47 | 47 歳 | 山木美術（大阪）5 月 10 日～5 月 20 日にて現代彫刻3人展。 |
| | | | 第 36 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《罔象女　1》《罔象女　2》出品。 |
| | | | この頃野外設置作品《越のわらべ》の原型を木彫で制作し、ブロンズ像が武生公演に設置される。 |
| 1973 | 昭和 48 | 48 歳 | 山木美術（大阪）6 月 28 日～7 月 4 日にて第 2 回現代彫刻3人展。 |
| | | | 初の個展、木彫レリーフ内藤堯雄個展（高宮画廊（大阪）4月５日～4月１４日）に木彫レリーフ20点を出品。 |
| | | | 第 37 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《長とその娘》出品。 |
| 1974 | 昭和 49 | 49 歳 | 第 38 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《立》出品。 |
| | | | 内藤堯雄木彫展（高宮画廊4月１５日～4月２７日）に木彫20点、レリーフ16点、デッサン7点出品。 |
| 1975 | 昭和 50 | 50 歳 | 第 39 回新制作展（東京都美術館 9 月 23 日～10 月 10 日）に《手を組む2つの像　2駆》出品。 |
| | | | 初めて乗った飛行機が雷雨で激しく揺れ死ぬ思いをする。この体験が翌年の素描展・星座シリーズを生むことになる。 |
| 1976 | 昭和 51 | 51 歳 | 第 40 回新制作展（東京都美術館 9 月 21 日～10 月 8 日）に《蹲る》出品。 |
| | | | 内藤堯雄木彫・素描展（高宮画廊　開始日不明～9月 11 日）にて個展。木彫60点、レリーフ10点、素描41点を出品。 |
| 1977 | 昭和 52 | 52 歳 | 第 41 回新制作展（東京都美術館 9 月 22 日～10 月 10 日）に《越のかたり　A》《越のかたり　B》出品。 |
| | | | 2周年記念ギャラリー風（所在地不明　会期不明）に《窮》出品、他作品不明。 |
| | | | 第 7 回武生市民文化賞受賞。 |
| 1978 | 昭和 53 | 53 歳 | 第 42 回新制作展（東京都美術館 9 月 27 日～10 月 12 日）に《アストロの女》《くぐまる人》出品。 |
| | | | 高宮画廊（会期不明）にて個展。（個展タイトル不明） |
| 1979 | 昭和 54 | 54 歳 | 第 43 回新制作展（東京都美術館 9 月 27 日～10 月 12 日）に《女　A》《女　B》出品。 |
| 1980 | 昭和 55 | 55 歳 | 第 44 回新制作展（東京都美術館 9 月 26 日～10 月 12 日）に《おんな》《横を向く女》出品。 |
| 1981 | 昭和 56 | 56 歳 | 内藤堯雄彫刻展（福井市民福祉会館 5 月 17 日～5 月 21 日）で約 120 点の作品を出品。 |
| | | | 内藤堯雄彫刻展（福井銀行大阪支店 6 月22日ー7 月 4 日） |
| | | | 愛宕山画廊（東京）にて個展。高宮画廊にて個展。 |
| | | | 福井県立美術館に《刻まれた記憶》《杉による作品》が収蔵（購入）される。 |
| | | | 福井県立美術館に《横を向く女》が収蔵（作家寄贈）される。 |
| 1982 | 昭和 57 | 57 歳 | 第 46 回新制作展（東京都美術館 9 月 21 日～10 月 6 日）に《座》出品。 |
| | | | 日動画廊（名古屋）（会期不明）にて個展。（個展タイトル不明） |
| 1983 | 昭和 58 | 58 歳 | 内藤堯雄木彫展（画廊彩博 6 月 24 日ー7 月３日）《座敷童》出品、他作品不明。 |
| 1984 | 昭和 59 | 59 歳 | 第 48 回新制作展（東京都美術館 9 月 27 日～10 月 13 日）に《うつむく女》出品。 |
| | | | この頃から体調を崩し入退院を繰り返すようになる。 |
| 1986 | 昭和 61 | 61 歳 | 武生市文化功労者賞受賞。 |
| 1988 | 昭和 63 | 63 歳 | 木彫家・内藤堯雄　油彩による素描画展（アートハウスギャラリー（福井）7 月 18 日～7 月 25 日）にて個展。 |
| | | | 父、内藤幸作（雅雲）逝去、91 歳。 |
| 1989 | 平成 1 | 64 歳 | 福井県文化芸術賞受賞 |
| | | | 内藤堯雄の木刻（アートハウスギャラリー9 月 15 日～10 月 8 日）にて個展。 |
| | | | 小野忠弘・富田惣七・内藤堯雄ドローイング展（アートハウスギャラリー開始日不明ー2 月 7 日）にドローイング作品出品。 |
| | | | VIVA！FUKUI《馬越祐一とその周辺》（アートハウスギャラリー4月１日～4月19日）に9名の作家の一人として作品出品。 |
| 1990 | 平成 2 | 65 歳 | 内藤堯雄　津田幸男二人展《二人展〈木の声・土の声・人の声〉内藤堯雄（ドローイング）津田幸男（詩・絵）》 |
| | | | （福井県立美術館貸展示場4月 6 日～4 月 15 日） |
| | | | 福井県立美術館に《赤い首》《2駆（海）》が収蔵（購入）される。 |
| 1991 | 平成 3 | 66 歳 | 内藤堯雄　津田幸男二人展《〈空・ものの怪・梢の判断〉展　津田幸男（詩・水彩・デッサン）　内藤堯雄（賛助・彫刻）》（福井県立美術館4月 4 日～4 月 12 日） |
| | | | 内藤堯雄展「童」（アートハウスギャラリー11 月 18 日～11 月 26 日）にて個展。 |
| | | | 福井県立美術館に《彫刻のためのドローイング集Ⅱ》（1～10）10 点が収蔵（寄贈）される。 |
| 1992 | 平成 4 | 67 歳 | 内藤堯雄　津田幸男二人展（福井県立美術館　会期不明）。 |
| | | | 郷土の作家たち展（福井県立美術館 6 月 26 日～7 月 12 日）出品。 |
| 1993 | 平成 5 | 68 歳 | 6 月 10 日腎不全のため逝去、68歳。第 57 回新制作展（東京都美術館 9 月 18 日～10 月 3 日）にて遺作出品。 |
| 2005 | 平成 17 | | 福井県立美術館に《玄牝》が収蔵（篠田めぐみ氏より寄贈）される。 |
| 2006 | 平成18 | | 内藤堯雄展（福井工芸舎 2 月 17 日ー3 月 12 日）デッサンと彫刻の展示。 |
| 2008 | 平成 20 | | テーマ展《立体　表現の多様性》《デッサンと下絵》（福井県立美術館 12 月 19 日～2009 年1月 18 日）出品。 |
| 2009 | 平成 21 | | 内藤堯雄の世界　ー没後15年・遺作展ー（武生公会堂記念館（越前市）2 月 28 日～3 月 29 日） |
| 2014 | 平成 26 | | 彫刻家　内藤堯雄・河西栄二作品展（岐阜大学早野邸セミナーハウス（岐阜県大垣市）10 月 18 日ー11 月 8 日）開催。 |

## Ⅲ　内藤堯雄の生涯

本章では，内藤堯雄の年譜（表２）に沿って生涯をたどる。年譜は「内藤堯雄の世界」(2009) を基に，展覧会案内や新聞記事，関係者への聞き取りを参考に追加記載や修正を行った。

### Ⅲ-1 生い立ち

内藤は，1925年に越前市京町（旧武生市有明町）に生まれる。本名は，内藤保次（ないとうやすじ)。堯雄（たかお）は雅号である。生まれてすぐに親戚の仏師，内藤孝作(ないとうこうさく)，雅号・雅雲（がうん）の家に養子に入る[1)]。幼い頃より仏像彫刻を学び，尋常小学校６年と高等科２年を卒業後，仏師として父と共に仏像制作に取り組む（図９)。19歳の時には大阪の美術展に木彫作品（図10）を出品している。この頃より，彫刻家雨田光平 (あまだこうへい1892－1985福井) から近代彫刻を学び，前衛的芸術家，馬越祐一 (まごしゆういち1902－1968愛媛) にも大きな影響を受け，伝統的な仏師の作仏とは別の彫刻表現への関心が高まっていく。

1949年頃には千恵さんと結婚し，市営住宅に住み，父雅雲のもとに通い仏像や欄間製作の仕事を続ける[1)]。

### Ⅲ-2 彫刻家としての出発

1956年31歳で自由美術展へ《湖北の女（赤い首)》（図11）を出品・入選を果たしている。1958年33歳には新制作展に《或る女》（作品不明，図13に推測作品を掲載した)，《黒い首》（図12）を出品・入選し，公募展への挑戦が始まる。

翌年の1959年34歳には第23回新制作展に《刻まれた記憶》（図14）を出品し，初の新作家賞の受賞を果たす。

次の年1960年に新制作展に出品した《象（コンポジション)》も直線的な形態の二人像の力作である。しかし入選はしたが，受賞には至らなかった。

彫刻家として順調な滑り出しであったが，その後1967年までの７年間新制作展への出品を取りやめている。また，ちょうどその頃に実の親から家をもらい移っている[1)]。長女千津子，長男了一が小学生の時期でもあり，仕事の自立や生活を重視したことが出品取り止めの理由であったと思われる。1962年内藤は42歳で再び新制作展に出品を始める。31回展《嶺北にあった２つの自刻像》（図16）出品，翌年第32回新制作展に《花かんざし》（作品不明，図16推測作品）を出品している。これらは残念ながら受賞には至っていない。しかし，この経験が翌年以降の飛躍のきっかけになったのだろう。

### Ⅲ-3 自身の表現の確立

33回展出品《杉による作品》（図18）と第34回展出品の《２躯（海)》（図19）で，新制作協会新作家賞を連続受賞する。

図9　新聞記事画像《入賞を親子で大喜び》
親子で仏像の制作にとりくむ内藤堯雄さん（45右）と父親の考作さん（73）

さらに1971年，第35回展出品《味真野》（作品不明，推測作品図20）で新会員に推挙される。作家としての実力を認められた内藤は，翌1973，1974年に大阪，山木美術にて，「現代彫刻三人展」を開催する。同じ新制作の会員である番浦有爾(1935生)，加藤明男（かとうあきお1927－　愛知）と内藤（1925生）という，同世代の気の合う３人で，表現を認め合ってのグループ展開催であろう。

この展覧会において内藤は，それ以後の自身の表現の方向,《罔象女(みずはのめ)》（図44),《玄牝(げんぴん)》（図90)，《座敷童》（図46）を見出した。これらは，神話や民話に基づくものである。

### Ⅲ-4 画廊との契約，作家としての活躍

1973年の三人展を見た大阪，高宮画廊の先代社長，高宮秀閣氏が内藤の仕事を高く評価し，1973年には，高宮画廊で「木彫レリーフ内藤堯雄個展」を開催する。その後も高宮画廊の契約作家として1974年，1976年，1978年，1981年と個展を続ける[2)]。

契約作家になり継続して作品をおさめる立場になり，作家として自立した内藤は，木彫作品以外にドローィング作品でも独自の表現を見いだし多くの作品を作り出した。大阪高宮画廊での５回の個展以外にも，1980年には郷里福井での大個展，1981年には東京，名古屋での個展も開催し，名実共に作家としての評価を確かなものにしたといえる。

1985年頃からは，体調を崩し入退院を繰り返す中[3)]，福井を中心として展覧会に出品した。そして1993年6月10日に68歳で逝去し生涯を閉じることとなる。

東京から離れた福井の地で一人制作を続け，独自の表現を切り開いた希有な作家であった。

## Ⅳ　コンクール・公募展（主に新制作）

表３は，内藤堯雄が出品したコンクール，公募展の作品を一覧にまとめたものである。

1968年《花かんざし》は，作品画像の資料がなく特定することができなかった。タイトル名と，生家にあった題名が特定できない作品写真から，推測した作品を図17の欄に示した。同様に《或る女》（図13），《味真野》（図20），《立》（図23），《越のかたり》（図26）も作品不明であるが，推測作品の画像を表に掲載した。今後調査を進め，関係者からの情報等で作品が特定される事を期待する。

本章では，この表を基に，内藤の作風の変遷を六つに分類しその特徴を示す。

### ①習作とアカデミックな彫刻表現　1944-1958

図10は，19歳の時に大阪の美術展に出品した《籠を持つ女》で，誠実に彫られた習作である。

その12年後31歳で自由美術展へ《湖北の女（赤い首）》（図11）を出品，33歳で新制作展へ《或る女》（作品不明，図13推測作品），《黒い首》（図12）を出品する。この時期の作品は，表面の描写ではなく豊かな量塊により構成された頭像であり，アカデミックな近代彫刻を学ぼうとする意欲と確かな力量が感じられる。

公募展を移った理由は定かでないが，以後は新制作展に出品を続ける。内藤は新制作協会に毎年等身大規模の作品の出品を続け，自身の表現を高めた。受賞を重ね，新会員となり彫刻家としての評価を確かなものにしたのである。

### ②直線構成の人物　1959-1967，1973

1959年《刻まれた記憶》（図14），1960年《象（コンポジション）》（図15），７年間出品を控える時期をはさみ1967年《湖北にあった２つの自画像》（図16），６年後の1973年《長とその娘》（図22）の４作品が同じ傾向として分類できる。

34歳での新作家賞受賞作《刻まれた記憶》では，それまでと作風が大きく変わっている。座る人と横たわる人２人組の構成で，細部は作られず極限まで単純化された表現である。

次の年1960年に新制作展に出品した《象》も直線的な形態の２人像の力作である。

1967年８年ぶりに出品した《湖北にあった２つの自画像》も，直線的な構成による作品といえる。樹種は不明だが，形態にシャープさがやや欠けているように感じる。

1973年《長とその娘》は，杉板を用いたもので，潔い手数の少なさが圧倒的な異質の迫力を生み出しているといえよう。簡潔な表現の理由の一つとして1973年は，後述する山木美術や高宮画廊での展覧会など多忙の中，短い時間で仕上げる必要があったと推測できる。

### ③曲面構成の抽象的造形　1969-1970

1969年《杉による作品》（図18）と1970年《２躯（海）》（図19）で，新制作協会新作家賞を連続受賞する。これらは曲面を生かし人体を抽象化した構成で，当時日本で展覧会が行われたヘンリー・ムーアの影響や西洋の近代彫刻へのあこがれが感じられる。

杉材を貼り合わせた寄せ木作りの様子が，生家の写真アルバムに残されており（図88），エスキースを基に計画的に作られた作品である。

### ④神話・民話の世界　1972，1978

**罔象女・玄牝・座敷童・道祖神**

罔象女は，日本神話の水の神で，内藤の地元福井県越前市の神社にも言い伝えがあるという。1972年《罔象女１》《罔象女２》（図21）は，新制作では唯一の神話をテーマにした作品である。詳細については後述するが，山木美術や高宮画廊では，神話や民話を基にした座敷童・罔象女・玄牝・道祖神等の作品が繰り返し発表されている。1978年《くぐまる人》（図28）にも「座敷童」のイメージが強く現れている。これらは内藤作品の代表的なテーマの一つということができる。

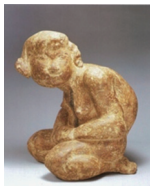
### ⑤ポーズや構成による形態追求　1975，1976-1978

1975年《手を組む２つの像　２躯》（図24），1976年《蹲る》（図25）の２作品を分類した。内藤が好んで用いる２体組の構成は，今までと変わらないが，これらは丸みをおびた量感がある形態をしている。そして他のものが内面的な描写が強いのに対して，動勢のあるポーズや造形的な形態の関連に重点が置かれているといえる。

### ⑥女シリーズ　1978-1984

1978年《アストロの女》（図27），1979年《女A》（図29），《女B》（図30），1980年《女》《横を向く女》（図32），1982年《座》（図33），1984年《うつむく女》（図34）の７作品を分類した。豊満でおおらかな女性像や，背中をまるめたたたずむ存在感が印象的である。晩年の内藤の人間観をよく表している作品といえよう。

表３　内藤堯雄　公募展コンクール作品一覧

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| <br>図 10《籠を持つ女》1944<br>欅　大きさ　作家蔵 | <br>図 11《赤い首（湖北の女）》1956 石膏・弁柄、<br>第 20 回自由美術展 | <br>図 12《黒い首》1958<br>杉　第 22 回新制作展 | 推測作品<br> <br>図 13《或る女》1958<br>第 22 回新制作展 | <br>図 14《刻まれた記憶》<br>1959　第23回新制作展<br>新作家賞 | <br>図15<br>《象（コンポジション）》1960<br>第24 回新制作展 |
| <br>図 16《嶺北にあった2つの自刻像》1967　第 31 回新制作展 | 推測作品<br> <br>図 17《花かんざし》1968<br>第 32 回新制作展 | <br>図 18《杉による作品》<br>1969 第 33 回新制作展<br>新作家賞 | <br>図 19《2躯》1970 第 34 回新制作展<br>新作家賞 | 推測作品<br> <br>図 20《味真野》1971 第 35 回新制作展<br>新制作会員推挙 | <br>図 21<br>《罔象女１》《罔象女２,》<br>1972 第 36 回新制作展 |
| <br>図 22《長とその娘》1973<br>第 37 回新制作展 | 推測作品<br> <br>図 23《立》※6<br>1974 第 38 回新制作展 | <br>図 24《手を組む2つの像 2躯》1975 柿・彩色,<br>第 39 回新制作展<br>岐阜大学彫塑研究室蔵 | <br>図 25《蹲る》1976<br>第 40 回新制作展 | 推測作品<br> <br>図 26《越のかたり A,越のかたり(レリーフ A エスキース)》1977<br>第 41 回新制作展 | <br>図 27<br>《アストロの女》 1978<br>第 42 回新制作展 |
| <br>図 28<br>《くぐまる人》 1978<br>第 42 回新制作展 | <br>図 29<br>《女　A》 1979<br>第 43 回新制作展 | <br>図 30<br>《女　B》 1979<br>第 43 回新制作展 | <br>図 31<br>《おんな》 1980<br>第 44 回新制作展 |  <br>図 32<br>《横を向く女》 1980<br>第 44 回新制作展<br>福井県美術館蔵 | <br>図 33<br>《座》 1982<br>第 46 回新制作展 |
| <br>図 34《うつむく女》 1984<br>第 48 回新制作展 | <br>図 35《女》 1984<br>第 57 回新制作展遺作展示<br>（1993 年開催）<br>第 48 回出品作 | <br>図 36《刻まれた記憶》<br>1959　第 57 回新制作展<br>（1993 年開催）遺作展示<br>第 48 回出品作 | <br>図 37《群像》 1974<br>第 57 回新制作展（1993 年開催）遺作展示 | <br>図 38《冬芽》 1980<br>第 57 回新制作展（1993 年開催）遺作図録掲載 | <br>図 39《座敷童》 1989<br>第 57 回新制作展（1993 年開催）遺作図録掲載 |

※図13，17，20，23，26は作品が特定できず，推測作品を掲載した。

## Ⅴ　1972～1983大阪中心の個展・グループ展

本章では，1972年以降内藤が大阪を中心に行ったグループ展や個展についてまとめた（表４）。1980年に福井市民会館で開催した個展についても，大阪高宮画廊の主催であり本章に分類した。

### ①山木美術　現代彫刻三人展　1972，1973

1972年，1973年に山木美術（大阪）で開催された「現代彫刻三人展」は，内藤（木彫），番浦（乾漆），加藤（テラコッタ）と材質の違う表現によるグループ展である。1972年の出品作は図44の《罔象女》以外は定かでないが，レリーフの連作と古代杉の寄せ木による立体の彫刻であったと1972年のパンフレット（図43）には書かれている。図45は1973年のパンフレットである。この頃内藤の生涯のテーマとなる《罔象女》（図48）や《玄牝（げんぴん）》（図90），《座敷童》（図46）

が初めて発表された。これをきっかけに，内藤は約10年に渡り高宮画廊と契約を結び，５回の個展を開催する事になる。

**②高宮画廊　木彫レリーフ内藤堯雄個展 1973**

図録（図47）から，会期４月５日～14日と，全20点の作品が確認できた。同じ名前の作品が多く，罔象女12点，玄牝２点，座敷童３点，いぶき２点という構成である。20～40程の長さの薄い洋材で作られており，ノミ跡はなく全体に引っ掻いた跡が見られる。どれも足を開きしゃがんだ女性像である。新聞記事は4点確認した。

**③高宮画廊　内藤堯雄木彫展 1974**

新聞記事から，会期４月15日～４月27日，木彫20点，レリーフ16点，デッサン７点，全43点ということが分かった。《祈り》（図50）《こころ》《ねがい》《望》等，杉材による小品14点，及びレリーフ８点を生家アルバム（福井県美術館借用）にて確認した。木彫は，全て座像で子どもらしき頭の大きなプロポーションで手を合わせたものが多い，顔等の細部は省略されノミ跡が効いている（図40）。前年の激しい表現から一転し愛おしさを感じる作風である。新聞記事は５点確認した。

図40《祈り》部分
細部を省略したノミ跡が効いている。

**④高宮画廊　内藤堯雄木彫・素描展 1976**

新聞記事３点を確認し，会期初日はわからなかったが，最終日は９月11日，木彫60点，レリーフ10点，素描41点（内14点は星座シリーズ）を出品していることがわかった。

生家アルバムの1976年撮影写真から《道祖神》（図52）など９点がこの展覧会に向けて作られたものと推測する。本展作品はヤスリで削られた跡の作品が多く，９月１日朝日新聞記事で以下の様に紹介している。

「木という素材をかきむしるようにして，土偶ににた木彫やレリーフを作る…きれいごとではすまされず，生命力のある表現を追求している情念のようなものを感じることができる。」[4)]

他の51点や，レリーフ10点は未確認であるが，作品の数の多さから，過去の高宮画廊での個展作品も含まれると想像される。

**⑤ギャラリー風　２周年記念・３人展 1977**

展覧会DMにて，開催年，展覧会名を確認した。開催日・ギャラリー所在地・３人が誰なのかは不明。作品《窮》がDM（図41）に掲載されている。

図41⑤展覧会DM
《窮》
ギャラリー風
２周年記念・3人展 1977

**⑥高宮画廊　内藤堯雄個展（展覧会名不明）1978**

1978年の高宮画廊での個展に関しては，新聞記事も展覧会案内も見つかっていない。そのため会期も出品作品内容も不明である。1980年の高宮画廊主催の福井での内藤堯雄彫刻展の案内掲載の年譜にて1978年の高宮画廊個展があったことが確認できるのみである。後年の展覧会図録掲載の1978年作という表記の作品や生家アルバムの1978年写真作品を仮に本展のための制作作品と考えてみると，数点の作品があげられる。《横を向く女》《五月》《想い》（図54），レリーフ作品《駆ける》《憩える女》（図53）である。どれも細部まで丁寧に彫り込まれ，張りのある丸みを帯びた形が特徴である。

**⑦福井市民福祉会館　内藤堯雄彫刻展 1980**

展覧会案内（図55），新聞記事３点を元に，会期は５月17日から21日，会場は福井市民福祉会館で開催されたこと，高宮画廊が主催し，120の作品が展示されたことが確認できた。展覧会案内では，大一ステンレス株式会社社長笠松了一氏，武生市長笠原武氏，衆議院議員福田一氏，高宮画廊高宮秀閣氏，一陽会会員神角四郎氏，彫刻家雨田光平氏，そして自身のコメントが掲載されており，地元福井での初の展覧会への思いの大きさが感じられる。これまでの作品を全て展示したと考えられるが，《誕生》（図56）は，この展覧会のために作られたと思われる。また1972年頃に野外設置作品の原型として作られた《越のわらべ》（図42）も展示された。

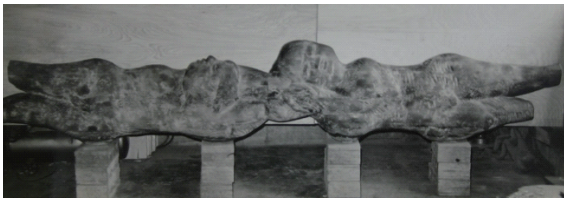


図42⑦《越のわらべ》木彫原型
1972頃、杉

**⑧福井銀行大阪支店　内藤堯雄彫刻展 1981**

展覧会案内から６月22日～７月４日に福井銀行大阪支店の主催で彫刻展が開催されたことが確認できた。1978年新制作展出品《アストロの女》と作者の言葉が展覧会案内に掲載されるのみで，展示作品数や内容はわからない。また高宮画廊との関係も定かでない。

**⑨愛宕山画廊，高宮画廊 内藤堯雄木刻展 1981**

展覧会案内（図60）から，会期は東京，愛宕山画廊が９月28日から10月９日，大阪，高宮画廊が，10月19日から26日の巡回開催と確認できた。案内には新制作協会会員，菊池一雄（きくちかずお1908-1985京都）の文章と，庭師で詩人の津田幸男（つだゆきお1936－　福井）の詩，1978年新制作展出品《くぐまるひと》（図28）が掲載されている。菊池は，文章中で「彼の特異な作風は伝統的な木彫とは凡そ縁のないもので，木彫というよりはむしろ木刻といったほうがふさわしいかも知れません。」[5] と述べている。内藤は，この言葉を気に入ったようで以後の個展では「木刻」を使っている。

東京展開催は，先代社長，高宮秀閣氏が長年あたためて来た念願の企画であった。現社長，高宮剛一氏への聞き取りによると，愛宕山画廊を紹介したのは，画家の麻生三郎（あそうさぶろう1913－2000東京）で，麻生は内藤を高く評価し。この展覧会で内藤の作品を購入したとのことである。

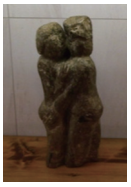
**⑩日動画廊（名古屋）にて個展 1982**

1982年，日動画廊（名古屋）の個展開催の記録確認は，「内藤堯雄の世界」展，図録（2009年　越前市武生公会堂記念館）掲載の年譜にて行った。個展名称，日程，出品作品は不明である。

**⑪画廊彩博　内藤堯雄木彫展**

画廊彩博（いかり）での個展開催と会期６月24日（金)から７月３日（日）は展覧会DMで確認した。開催年は不明だが1983年と1988年の曜日が一致し，DMに1981年までの略歴があり，1980年個展の菊池一雄の文章が本DMで使用されていることから，1983年開催と考える。《座敷童》がDMに掲載されている。高宮画廊との関係も不明である。

表４　高宮画廊他大阪等での個展，グループ展　一覧

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| <br>図 43①《現代彫刻三人展パンフレット》 1972　山木美術(大阪)※1 | <br>図 44①《罔象女(みずはのめ)》1972<br>木彫レリーフ　28.6×21.5㎝<br>現代彫刻三人展　山木美術(大阪) | <br>図 45①《第２回現代彫刻三人展パンフレット》 1973<br>山木美術(大阪)※3 | <br>図 46①《座敷童》 1973<br>H21×W44×D31.5㎝ 第２回現代彫刻三人展パンフレット 山木美術(大阪) | <br>図 47②《木彫レリーフ内藤堯雄個展図録》1973<br>高宮画廊(大阪)※2 | <br>図 48②《罔象女(みずはのめ)(1)》1973<br>木彫レリーフ　23.5×22.5㎝<br>木彫レリーフ内藤堯雄個展<br>高宮画廊(大阪) |
| <br>図 49③《内藤堯雄個展新聞記事》福井新聞 1974 年５月９日※４ | <br>図 50③《祈り》 1974<br>杉・砥の粉・墨　H29×W15×D17 ㎝　内藤堯雄個展<br>高宮画廊(大阪) | <br>図 51④《内藤堯雄木彫・素描展新聞記事》福井新聞 1976 年９月２日※５ |  <br>図 52④《道祖神》 1976<br>柿，砥の粉，漆　45×19×12 ㎝ 内藤堯雄木彫・素描展　高宮画廊(大阪) | <br>図 53⑥《憩える女》 1978<br>柿・砥の粉 H28×W64.5(レリーフ)　1978　高宮画廊個展に出品したかは不明 | <br>図 54⑥《想ひ》 1978<br>柿・砥の粉・漆 H45.5×W30×D16.5 ㎝　1978 高宮画廊個展に出品したかは不明 |
| <br>図 55⑦《内藤堯雄彫刻展案内》 1980　福井市民福祉会館(福井)※6 | <br>図 56⑦《誕生》<br>内藤堯雄彫刻展<br>福井市民福井会館(福井) | <br>図 57⑦《女》神代杉，<br>内藤堯雄彫刻展<br>福井市民福井会館(福井) | <br>図 58⑦《幼女》杉，<br>内藤堯雄彫刻展<br>福井市民福井会館(福井) | <br>図 59⑧《内藤堯雄彫刻展案内》 1981　福井銀行大阪支店(大阪) | <br>図 60⑨《内藤堯雄木刻展案内》 1981　愛宕山画廊(東京),高宮画廊(大阪) |

## Ⅵ　1988～2014 福井中心の個展・グループ展

本章では，1988年以降に内藤が福井を中心に行った個展やグループ展と，内藤が亡くなった1993年以降の内藤作品の展覧会についてまとめた（表５）。

郷里福井での展覧会は，福井市内にあるアートハウスギャラリーを中心に行われている。

**①アートハウスギャラリー　油彩による素描画展 1988**

平面作品のみの展示である。展覧会案内（図62）から，会期は７月18日から25日と確認できた。案内に掲載されている作品図版（図62）（図63）が２点確認できた。黒字の背景に白い人物が描かれている。案内には，福井県立美術館学芸課長の松村忠祀氏の文章が寄せられている。

**②アートハウスギャラリー　内藤堯雄の木刻 1989**

新聞記事２点，展覧会DMを確認し，会期は９月15日から10月８日，出品構成は，新聞記事や会場写真から《二躯(海)》(図19),《座敷童》,《越の女》(図89),《幼》《手を合わせる》《祈り》《群像》(図37),《長とその娘》(図22) など木彫10点ドローイング６点，合計16点と分かった。新作と過去の作品を合わせた構成である。

**③アートハウスギャラリー 小野忠弘[6]・富田惣七[7]・内藤堯雄ドローイング展，1990**

新聞記事１点（図66）を確認し，会期初日は不明だが，最終日は２月７日，ドローイング10点を出品している。新聞掲載作品《横たわる女》は，黒地に白い女性全身像で彫刻のためのエスキースと解説されている。「内藤堯雄の世界」展図録に1990年作の《彫刻のためのドローイングⅡ》という10点組の作品が掲載されているが，《横たわる女》は含まれず別作品である。

**④アートハウスギャラリー，VIVA福井 馬越祐一とその周辺，1990**

展覧会案内（図67）から，会期は４月１日から19日，出品作家は馬越祐一，寺田政明，麻生三郎，中村徳三郎，細井憲磨，内藤堯雄，松山幾三郎，津田幸男の９名と確認できた。馬越祐一は，福井で中学の英語教師を続けながら，貝殻や花等の油絵をモチーフに独自の世界を描きだした洋画家である。案内には，福井県立美術館学芸課長の松村忠祀氏の文章「馬越祐一とその周辺に寄せて」がある。

出品リストから，内藤は《赤い首》《童》《座る女》など４点を出品したことが分かった。

**⑤福井県立美術館　内藤堯雄　津田幸男二人展 1990**

展覧会DM（図67）１点を確認した。会期は４月６日から15日，内藤がドローイング，津田が詩と絵を出品している。詳細は不明である。

**⑥アートハウスギャラリー，内藤堯雄展「童」1991**

展覧会DM（図69）と新聞記事各１点を確認した。会期は11月18日から26日，座敷童３点，和紙に墨と油彩によるドローイング40点が展示された。

**⑦福井県立美術館,内藤堯雄 津田幸男二人展 1991**

郷土の作家たち展年譜に本展開催の記載があり，1992の二人展案内に第３回と書かれていることから，本展が開催されたと思われるが，DMや新聞記事は確認できていない。詳細も不明である。

**⑧福井県立美術館，第三回内藤堯雄，津田幸男二人展，1992**

展覧会案内（図72）と新聞記事１点を確認した。会期は４月４日から12日，内藤が木彫３点とドローイング12点，津田が詩30編と水彩画60点，デッサン17点を出品している。

**⑨アートハウスギャラリー,「内藤堯雄・了一展」1992**

内藤了一（ないとうりょういち 1955－　福井）は，内藤堯雄の長男で武蔵野美術大学工芸工業デザイン科を卒業した木工家具のデザイン・創作を行う作家である。展覧会案内・DM（図71）を確認し，会期は６月26日から７月７日，内藤堯雄が木彫10点とレリーフ４点，ドローイング20点，内藤了一が創作家具約10点を展示したことがわかった。DMから《座敷童》１点を確認し，他の出品作は不明である。

**⑩福井県立美術館,郷土の作家たち展，1992**

内藤堯雄，大村武史（おおむらたけし1907－　福井），上出穂美（かみでほよし1917－　福井），郷土出身三作家の展覧会である。展覧会図録(図73)，新聞記事２点，オープニングセレモニーと会場の写真（図74）を確認した。会期は，６月26日から７月12日で，内藤は石膏１点，木彫33点，木彫レリーフ11点，ドローイング15点，合計60点を展示している。内藤が亡くなる前年

に開催された本展は，新制作展受賞作品や高宮画廊で個展開催時のものなど，内藤の主要作品が網羅された充実した作品構成になっている。本展図録の年譜は，詳細な生い立ちや新制作展の出品状況など重要な資料であり，筆者の調査もこれに依るところが大きい。図録掲載文章の「郷土の作家たち展によせて」は，福井県立美術館学芸員，芹川貞夫氏により書かれている。

**⑪福井県立美術館,テーマ展「立体 表現の多様性」「デッサンと下絵」, 2008**

展覧会会場で初めて内藤堯雄作品を実見した。また展覧会目録と新聞記事（図75）2点を入手した。会期は12月19日から2009年1月18日，高田博厚（たかだひろあつ1900－1987石川）6点，内藤堯雄15点（彫刻5点，ドローイング10点），池田雅彦（いけだまさひこ1957－　福井）6点，雨田光平5点，他5人6点，合計9人38点の出品である。

**⑫越前市武生公会堂記念館，内藤堯雄の世界－没後15年遺作展－, 2009**

展覧会会場で作品を実見した。また展覧会図録（図76）を入手した。会期は2月28日から3月29日，彫刻20点（石膏1点，木彫16点，木彫レリーフ3点），ドローイング36点の出品である。1992年の郷土の作家たち展同様，内藤の主要作品が出品されている。郷土の作家たち展では未展示で本展に新たに出品された彫刻が8点ある。その内，1944年作19歳の作品《籠を持つ女》(図10) を展示したことは，内藤が本格的に近代彫刻を始める前の状況が分かり貴重である。

また26点のドローイング作品も1992年には展示されなかったものである。

**⑬岐阜大学早野邸セミナーハウス，彫刻家 内藤堯雄・河西栄二作品展, 2014**

筆者が企画・運営した展覧会で，岐阜県大垣市にて展示を行った（図61）。会期は10月18日から11月8日，内藤堯雄の木彫1点（図24），レリーフ（図94，96）3点，平面作品（図79）16点，合計20点と筆者の木彫作品6点を展示した。これらは高宮画廊社長高宮剛一氏より，岐阜大学彫塑研究室に寄贈していただいた内藤作品であり他にも平面作品が20点ある。

図61　会場風景

表5　アートハウスギャラリー他福井での個展，グループ展一覧

図 62①《木彫家 内藤堯雄油彩による素描画展案内》1988 アートハウスギャラリー（福井）※9

図 63①《題名不詳》木彫家 内藤堯雄油彩による素描画展 1988 アートハウスギャラリー（福井）

図 64②《内藤堯雄の木刻DM》1989 アートハウスギャラリー（福井）※10

図 65②《越の女》1989 杉，砥の粉，漆 23×61.5×24 cm 内藤堯雄の木刻 アートハウスギャラリー（福井）

図 66③《小野忠弘・富田惣七・内藤堯雄ドローイング展新聞記事》，日刊福井 1990年1月22日※11

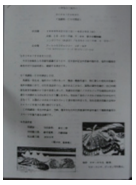


図67④《VIVA福井 馬越祐一とその周辺展案内》1990 アートハウスギャラリー（福井）※12

図 68⑤《津田幸男・内藤堯雄二人展DM》1990 福井県立美術館（福井）

図 69⑥《内藤堯雄展「童」》1991 アートハウスギャラリー（福井）※13

図 70⑥《座敷童》1989 24×35×24 cm 内藤堯雄展「童」(1991、アートハウスギャラリー※14

図 71⑨《「内藤堯雄・了一展」DM》1992 アートハウスギャラリー（福井）※15

図 72⑧《第三回 津田幸男・内藤堯雄二人展 案内》1992 福井県立美術館

図 73⑩《郷土の作家たち展図録》1992

図 74⑩ 郷土の作家たち展会場写真 車いすを押されて会場をまわる内藤堯雄氏

図 75⑪《福井県立美術館，テーマ展「立体 表現の多様性」「デッサンと下絵」，新聞記事》

図 76⑫《内藤堯雄の世界－没後15年遺作展図録》

図 77⑫《幼女》柿・砥の粉・漆，61×66×43 cm 越前市武生公会堂記念館蔵

図 78⑬《,彫刻家 内藤堯雄 河西栄二作品展，案内 2014 岐阜大学旧早野邸セミナーハウス

図 79⑬《不詳》和紙に油彩 岐阜大学彫塑研究室蔵

## Ⅶ　新聞記事

表６は内藤堯雄関連の新聞記事一覧である。記事の入手方法は，福井県立美術館，高宮画廊，アートハウスギャラリー，生家での取材，及びインターネットによる新聞記事検索サービス（G-Search）の利用によるものである。

これらの新聞記事から個展の名称や会場，日程が判明したり，新制作展に出品した作品のタイトルや作品を数多く特定することができた。

しかし，このリストではすべての新聞記事が網羅されているとは考えにくい。1970年第34回新制作展での他の受賞や1971年第35回新制作展新会員推挙，1972年頃の福井市の公園にブロンズ像《越のわらべ》が設置されたことなどは新聞記事として掲載されたと思われる。

今後も過去の新聞記事の検索，収集を進めていきたい。

また，記事として執筆された記者のコメントは作家の評論として貴重である。特に毎日新聞の亀田正雄氏の評論は内藤堯雄の世界観を的確に表している。

表６　内藤堯雄　新聞記事一覧

| No. | 年月日 | 新聞社 | 新聞記事タイトル（執筆者） | 「展覧会名」（開催場所）《作品タイトル》 |
|---|---|---|---|---|
| ① | 19600901 | 福井 | アトリエ訪問　新制作協会　内藤堯雄 | 「第24回新制作協会展」《象》 |
| ② | 19691026？ | 福井？ | 嶺南嶺北　入賞を親子で大喜び | 「第33回新制作協会展」《杉による作品》新作家賞 |
| ③ | 19691006 | 朝日夕刊 | 秋の公募展から | 「第33回新制作協会展」《杉による作品》新作家賞 |
| ④ | 19691024 | 毎日 | 新制作展評（亀田正雄） | 「第33回新制作協会展」《杉による作品》新作家賞 |
| ⑤ | 19730410 | 毎日夕刊 | 浮世絵展二つと彫刻展二つ　美術評（亀田正雄） | 「木彫レリーフ内藤堯雄個展」（大阪高宮画廊） |
| ⑥ | 19730411 | 朝日 | しゃがんだ女の構図に安らぎ内藤堯雄木彫ﾚﾘｰﾌ個展 | 「木彫レリーフ内藤堯雄個展」（大阪高宮画廊） |
| ⑦ | 19730411 | ｻﾝﾃﾞｰ福井 | 躍動する郷土の作家たち（Ⅰ）内藤堯雄氏の個展など | 「木彫レリーフ内藤堯雄個展」（大阪高宮画廊） |
| ⑧ | 107304?? | ？ | 人びとの心にすむ原始への回帰 | 「木彫レリーフ内藤堯雄個展」（大阪高宮画廊） |
| ⑨ | 19740418 | 毎日夕刊 | 美術評　内藤堯雄木彫展　素朴な生命力（亀田正雄） | 「内藤堯雄木彫展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑩ | 19740420 | 朝日 | 自然への回帰　内藤堯雄木彫展　鈴木政夫石彫展（池） | 「内藤堯雄木彫展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑪ | 19740423 | 読売夕刊 | 美術　内藤堯雄展　民話の人間像追う（安） | 「内藤堯雄木彫展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑫ | 19740501 | 朝日 | 内藤堯雄木彫展（４・１５～２７大阪・高宮画廊） | 「内藤堯雄木彫展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑬ | 19740509 | 福井 | 人物像を中心に43点　武生の内藤堯雄氏　大阪で彫刻の個展 | 「内藤堯雄木彫展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑭ | 19760901 | 朝日 | 内藤隆雄の新作発表展リアリティ追及全体にほとばしる情念 | 「内藤堯雄　木彫・素描展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑮ | 19760903 | 読売夕刊 | よみがえった土俗の美　内藤堯雄展（安） | 「内藤堯雄　木彫・素描展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑯ | 19760902 | 毎日夕刊 | 生命の原像追う　内藤堯雄木彫・素描展（亀田正雄） | 「内藤堯雄　木彫・素描展」（大阪　高宮画廊） |
| ⑰ | 19800518 | 福井 | あふれる重量感・・福井　内藤さんが木彫個展 | 「内藤堯雄彫刻展」（福井市民福祉会館） |
| ⑱ | 19800518 | 毎日 | 目を引く木彫りの美　内藤さんが個展 | 「内藤堯雄彫刻展」（福井市民福祉会館） |
| ⑲ | 19800529 | 福井？ | 彫刻の内藤さん（武生）初個展　福井　木肌に不思議な生命力　一挙に120点人間臭さで魅了 | 「内藤堯雄彫刻展」（福井市民福祉会館） |
| ⑳ | 19890923 | 福井 | 木肌に不思議な生命感　ひたすら人間性求めて　福井内藤堯雄さんが個展 | 「内藤堯雄の木刻」（福井　ｱｰﾄﾊｳｽｷﾞｬﾗﾘｰ） |
| ㉑ | 19890924 | 日刊福井 | 原始的な生命感漂う木彫など力作16点　内藤さん（武生）が福井で個展 | 「内藤堯雄の木刻」（福井　ｱｰﾄﾊｳｽｷﾞｬﾗﾘｰ） |
| ㉒ | 19900122 | 日刊福井 | 福井でドローイング展　小野忠弘、富田惣七、内藤堯雄 | 「小野忠弘・富田惣七・内藤堯雄ドローイング展」（福井ｱｰﾄﾊｳｽｷﾞｬﾗﾘｰ） |
| ㉓ | 19911120 | 福井 | フォルムの集大成　ドローイング40点 | 内藤堯雄展「童」（福井　ｱｰﾄﾊｳｽｷﾞｬﾗﾘｰ） |
| ㉔ | 19920408 | ？ | 展況　内藤堯雄・津田幸男二人展 | 「内藤堯雄・津田幸男二人展」（福井県立美術館） |
| ㉕ | 19920618 | 福井？ | 郷土の作家を紹介　武生の内藤さんら３人　26日から県立美術館で | 郷土の作家たち展（福井県立美術館） |
| ㉖ | 19920715 | 福井 | 美術福井時報　郷土の作家展（樫尾正次） | 郷土の作家たち展（福井県立美術館） |
| ㉗ | 19930611 | 日刊福井 | 内藤保次死去 | |
| ㉘ | 20050209 | 福井 | 書と人の美究めた３１点　武生　地元出身作家ら展示 | 「書の美／人間のイメージ」（武生市公会堂記念館） |
| ㉙ | 20060215 | 福井 | 本社催し（２５日）後援〈内藤堯雄展（３月１２日まで　福井市のふくい工芸舎） | 「内藤堯雄展」（福井　ふくい工芸舎） |
| ㉚ | 20081220 | 福井 | 彫刻テーマ初　館蔵品を展示　本県ゆかり４作家１９点　県立美術館 | 「立体　表現の多様性」（福井県立美術館） |
| ㉛ | 20090114 | 福井 | 【文化】福井の彫刻家　館蔵品で紹介　１８日まで県立美術館 | 「立体　表現の多様性」（福井県立美術館） |
| ㉜ | 20090304 | 福井 | 彫刻家内藤氏の世界探る　越前市　没後１５年機に５６点展示 | 企画展「内藤堯雄の世界」（武生市公会堂記念館） |
| ㉝ | 20141018 | 岐阜 | 人物表現追求　大垣で木彫展 | 彫刻家　内藤堯雄　河西栄二作品展<br>（岐阜大学旧早野邸セミナーハウス） |

## Ⅷ　内藤堯雄作品の技法・思想・表現

本章では，内藤堯雄の技法・思想・表現についてまとめる。

### Ⅷ-1 技法

#### (1) 材料　樹種

内藤堯雄が使う樹種は，主に杉と柿である。

図80 福井新聞画像
アトリエ訪問
新制作協会　内藤堯雄

杉は木目に沿って割れやすいため，彫刻材としてはあまり使われない。内藤が仕事としていた仏像や欄間の制作では，通常檜や樟が用いられる。

杉や柿が手近な所で安価に入手できたという理由もあるだろうが，こうした特殊な樹種の使用は内藤が自身の独自の表現を追求した結果だといえる。以下は1960年の新聞記事であるが，内藤35歳の新制作出品作品制作中（図80）の取材の中で，材料についての記載がある。

「…中略…小道具の一杯並べられた狭いアトリエで一ヶ月ほど前から出品作と取り組んでいるが“杉の木”という素材をいかすためあまりほり込まない。むしろ微妙な線や立体感で人間を表現するという。」[8)]

樟や檜のような扱い易い材で思い通りになりすぎることを嫌い，あえて扱いにくい材を用いて制約をもうける中から生まれる形態の魅力を求めたと考える。

#### (2) 道具・ノミ・ヤスリ，特殊な道具類

2009年の生家訪問において，内藤の木彫道具の調査を行った。叩きのみや小刀類は，木製の引き出し７段程に納められ，槍かんななど様々な道具が確認でき，総数は200本以上であった。図81の小刀類だけでも100本以上あり，仏師の父，雅雲から引き継いだものもあるだろう。小刀やかんなは現在も息子で木工家の了一さんが使用しているとのことであり，雅雲，堯雄，了一と三代続いて木を用いて作品を作る家の歴史を感じる。これらの道具からは，よく切れるノミで自在に形作る作品のテクスチャーを想像するが，きれいなノミ跡をみせる作品は晩年に多く，1970から80年代には引っかいたり削ったりしたテクスチャーのものが多く，あえてノミの切れ味を消した表現を選んでいる。

次の文は，道具について内藤が語ったものである。

「彫刻は重労働ですよ。わたしはノミ，ノコギリ，ヤスリ，ナタと手当り次第に使って彫刻します。だが彫刻の素材は絵画と違って抵抗が強い」[9)]

また内藤は特殊な道具を自作して制作に用いている。図82は，生家の道具の中から特殊なノミをまとめたものである。細いノミの先端を加工し，引いて削ることができる刃先（図84）のものや，のこぎり目立て用のやすりの，手前角を研いで刃をつけ，引いて削れるようにしている（図83）。

これらを用いて，杉や洋材等軟らかい材料を引っかいて削り取り，形作ったと考える。内藤の独自の表現のために作られた道具ということができる。

#### (3) エスキース，木取り，面取り

内藤の作品は，一見，直彫りで木の形に任せて彫り進めた無計画な形態に思われがちだが，実は実作品制作の前に，デッサンや粘土でのエスキース（小品制作）を繰り返し行い，その原型を緻密に拡大する制作手法を用いている。制作中の写真からは，その様子が良く分かる。

図85では，1972年新制作展出品の《罔象女１》（図21）のためのデッサンが壁に８枚程貼られている。そこには強烈なイメージの人体が大胆にデフォルメされて描かれている。図86は，粘

図81　彫刻道具（小刀）
小刀類だけでも百本以上あり、現在も息子で木工家の了一さんが使用している。

図82　彫刻道具（特殊）
自作の特殊な道具も多数確認した。

図83
のこ刃目立て
ヤスリの手前角に刃がついている。

図84
細いのみ先を加工した引いて削る刃先

図 85《罔象女》デッサン複数のイメージデッサンが壁に貼られている

図 86　粘土で作られた《罔象女》エスキース

図 87 木取りの様子エスキースを元に正確に拡大している。

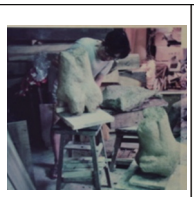


図 88《2躯(海)》の粘土によるエスキース、人体のトルソということがよくわかる

図 89《2躯(海)》の杉材を貼り合わせた様子

図 90《2躯(海)》を制作中の内藤堯雄

土によるエスキースである。手前の小さな粘土作品は，手びねりでイメージを探すためのものである。奥の粘土作品は，高い完成度で仕上げてあり，これを拡大して木彫作品を作っている。図87は，本作品の制作途中であり，エスキースと同じプロポーションをしており，３倍程に拡大されている。手前の肘部分の墨線の跡からは，正確な墨入れをしてから彫り進めていることが分かる。図88，図89，図90は，1970年作《２躯（海）》の制作過程である。粘土によるエスキースを制作し（図88），それに見合う体積の材料にするために，杉材を貼り合わせ（図89），その後粗彫りを進める様子である（図90）。

**(4) レリーフ，彫刻（一木，寄木），ドローイング**

レリーフは，初期の荒々しい全身像（図91），群像によるおおらかな表現（図92），中期の背景を切り抜いた体部分のみの中肉彫りの表現(図93)，小さな横長の板に顔をトリミングして配置したもの（図94），後期の厚肉彫りで寝そべる女性の全身像（図95）などに分類できる。画廊での発表では丸彫りに加え，こうしたレリーフやドローイングは，内藤作品の中心的な表現様式であった。

丸彫りの木彫では，初期の新制作展出品作は杉による寄木技法の物が多い。新制作協会会員になってからのうずくまる形態の作品は，ほぼ一木で柿を用いている。芯去りは特に行われず，大きな作品で生じた割れは，漆や砥の粉で埋めている。

**Ⅷ-2 思想（神話・民話）**

内藤は，1972年山木美術の三人展を皮切りに，新制作展，1973年山木美術での第２回三人展，初の高宮画廊木彫レリーフ個展と連続で罔象女，玄牝を発表し始める。また1973年に発表した座敷童は，1980年代まで長く制作するテーマとなった。これらの神話の世界は，内藤が長年あたためてきたテーマであったという[10]。

**(1) 罔象女**

1973年の山木美術での三人展案内に次のような内藤の言葉が掲載されている。

「罔象女（みづはのめ）…テーマとなった日本神話の水神，いつからそんな格好をされて何千年という月と日を過ごして来られたのだろうか。天平，弥生，縄文，定かでない。罔（まぼろし）の象を借りたか，五体をただすーと通り抜けた大虚の風のたおやめだろうか。」[11]

高宮秀閣氏の次の言葉は，内藤の《罔象女》《玄牝》の本質を見事に言い表している。

「内藤さんの彫刻は，暖い肌のぬくもりの内側から，ぶすぶすとあやしい生命のたぎる音をたてて，ゆれ動いています。そこには，おつにすました姿はなにもない。名状しがたい情念の世界…これは宗教以前のものであり。西洋人のまねではなく，東洋人の然も日本の造型の根元の世界ではなかろうか…」[12]

**(2) 玄牝**

玄牝（げんぴん）とは，老子の道徳教第６章の言葉で，峰屋邦夫の訳では６章は次のようになる。

「谷の神は不死身である。それを玄妙なる牝（めす）（玄牝（げんぴん））という。玄妙なる牝の陰門（玄牝の門）を，天地の根源という。ずっと続いて存在し続けているようであるが，いくら働いても尽き果ててしまうことはない。」[13]「老子」蜂谷邦夫訳注，岩波文庫，2008

玄牝の門は，女性器を指す言葉であり，万物はそこから生まれてくるという意味を持つ。

**(3) 座敷童**

座敷童は，柳田国男の民話に影響を受けて取り組んだもので，内藤の作品の中でも生涯を通して取り組んだ重要なテーマだといえる。座敷童が住み着いた家は栄えるという伝説は，作品購入を考える上で好まれたであろうと思われる。

図 91《玄牝(3)》
320×280 ㎝, 1973
木彫レリーフ内藤堯雄展
高宮画廊

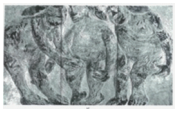


図 92　《三人の裸婦》1973
柿・墨
53×89 ㎝
個人蔵

図 93 背景を切り抜いた中肉彫りの全身像レリーフ、《題名不詳》
生家アルバムより

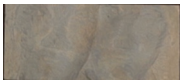


図 94　トリミングされた顔のレリーフ《二人》
岐阜大学彫塑研究室蔵

図 95 トリミングされた顔のレリーフ

図 96 厚肉彫りのレリーフ
岐阜大学彫塑研究室蔵

**(4) 女**

1978年の《アストロの女》の頃から，女性像に健康な生命力，エロティシズムが現れる。罔象女や玄牝に見られた攻撃的な奇怪な表現は消えている。しかし，背中を丸めた頭の大きなプロポーションは残され，内藤の人間観がよく現れている。

**Ⅷ-3 表現（造形性）**

**(1) レリーフ表現の特徴**

レリーフの表現を見てみると，1972年頃の初期のものは，1.5㎝程の厚みのラワン等の洋材による荒々しいもの（図91）と，柿の板材による群像等のおおらかな表現のもの（図92）に分けられる。どちらもノミで彫ったりヤスリで削ったりし，ベンガラや墨で着色してから，さらに彫ったり削ったりを繰り返している。

中期1980年頃の，背景を切り抜いた中肉彫りの全身像レリーフ（図93）では，柿が主に使われている。中肉彫りのレリーフならではの，圧縮した量の扱いが魅力的である。顔のトリミングされたもの（図94）（図95）は，9㎜程の杉板等で薄肉彫りに作られている。これらはヤスリで引っかき，砥の粉を用いて仕上げた物が多い。

1985年以後と思われる後期のもの（図96）は，4～ 5 ㎝の厚肉彫りで女性の横臥像を細部まで丁寧に彫り，ステインなどで着色し仕上げられている。

**(2) 丸彫り木彫の特徴**

内藤の作品は，頭の大きなプロポーションで，シンメトリーなポーズが多い。また組作品の構成により空間を大きく生かしている。人物はほとんどが女性像と児童である。立像の作品も少数ながら制作しているが，ほとんどのポーズは，足を曲げた座像である。

図97《しゃがむ》
1981　墨・弁柄・漆
24×26×13.5㎝
個人蔵

造型作家の橿尾正次（かしおまさじ1933－　福井）が1992年に内藤作品を評した次の新聞記事は，内藤作品のポーズの特徴とその魅力を，的確にいい得ている。

「彼が彫り出した女たちは，しゃがんだり，うつむいたり座ったりして地面に近い姿勢をとっている。屈のポーズが多い。作品《しゃがむ》（図97）は大地の水平面に対し，股を広げて正面を向くポーズになっていて，垂直の面をつくり，それだけに造型の力は強い。どの作品も量塊の魅力を感じさせ見あきなかった。」[14]

**Ⅷ-4 表現（精神性）**

「彫刻の既成概念を楽々と乗り越えた，異様に醜く，奇妙に美しい，確たる一つの存在・・人間に内在する神秘なもの，恐ろしく神的でもあり悪魔的なものが混沌と一体化され，見事な内的統一を示している…」[15]

これは，一陽会会員，神門四郎の内藤作品評であり，美醜を超えた内藤の世界観がよくわかる。

また内藤は次のような言葉を残している。

「人間にはあか，染み，涙，血などもあり，美しさだけでは解決できない…中略…原始的な生命観が宿り，魂の輝きがある。きれいごとでは済まない真実の姿の中にも美しさがある」[16]

「醜く，美しい人間像」とは，まさに内藤作品の核心をついている。

芹川貞夫は内藤作品を次のように評した。

「内藤の具象作品に見られるものは，造形意識よりも，精神や意識や情念の原初的形態とでも呼ぶべき，内藤が自らの血肉として持っている原質であり，内藤の感覚に染み込んだ彼独特の宗教思想である。中略（20年の間に）大きな作風の変遷や，作品の質の違いは無いと言ってよく，これは内藤の場合，最初から最後まで自分の中から出てくるものは，彼の血肉化した原質しかなかった[17]

一貫した精神のもと，本質が変わることは無く制作を続けた内藤の表現原理が良く分かる言葉である。

## Ⅸ　他作家の影響・交友関係

本章では，他の作家からの影響，交友関係，人柄について述べる。

### (1) 内藤雅雲

内藤は，仏師であり父の内藤雅雲から，仏像彫刻を学んだ。ここで学んだ技術が内藤の基盤となっていることは間違いない。芹川はこうした生い立ちが「内藤の血肉となり，独特の宗教性を帯びた作品制作の背景になっている」と指摘している[18]。

### (2) 馬越祐一

内藤は，中学のころ英語の先生（※馬越祐一）からモディリアーニ（Amedeo Clemente Modigliani 1884－1929 伊）やシャイム・スーチン（Chaim Soutine 1893－1943 露）の芸術について聞いてから，伝統の仏像彫刻をはなれ，創造の世界へはいっていったという[19]。

馬越は，英語教師の仕事に就きながら洋画家として制作を続け，地方にありながら麻生三郎など東京の作家からも認められる作家であった。内藤の生き方もまさに同じである。中央から離れ，地方で自身の制作を貫いた人生であったといえよう。

### (3) 雨田光平

内藤は20歳の頃に雨田に師事し近代彫刻に触れたという。内藤55歳の福井市民福祉会館個展に雨田は文章を寄せ，「彼は三十数年前からいつも私方にこられ何かと芸術談をかわした間柄です」[20] とある。1966年の年賀状（図98）の文面からも，交友の深さが伺える。

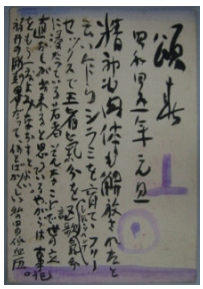


図98　雨田光平からの年賀状
1966年（昭和41年）1月

### (4) 津田幸男

内藤の古くからの友人で，庭師でありながら詩人の津田は，1973年の高宮画廊木彫レリーフ個展図録に「罔象女」という詩を掲載している。神話や民話の世界に内藤が傾倒したのには，津田の影響もあったのでないだろうか。津田は内藤の作品について「美の添加物ばかりがやたら目につく次代，無添加の海を悠々と渡る一途な精神を感ずる」[21] という。内藤が体調を崩した晩年には福井県立美術館で三年に渡り二人展を開催するなど生涯にわたる友であったのだろう。

### (5) 麻生三郎

内藤が麻生を知ったのは馬越からだという[22]。1981年の愛宕山画廊個展は，麻生三郎が画廊を紹介したという。その展示では麻生は内藤の作品を購入したそうであり，麻生が内藤を高く評価していたことが分かる。内藤のドローイングは麻生の人物表現によく似ており，共通の価値観を感じる。

### (6) ヘンリー・ムーア等の影響を与えた作家

1969年10月に大阪梅田で開催されたヘンリー・ムーア展の図録を内藤の生家でみつけた。翌1970年，第34回展出品の《２躯（海）》（図19）は，曲面を生かし抽象化された人体であり，ムーアの影響を感じさせる作品である。強く抽象化された内藤作品はこの１点のみである。

エミリオ・グレコ（Emilio Greco 1913-1995 伊）や木喰の図録も生家で見つけた。グレコの図録は，痛みも激しく内藤が何度も見ていたと思われる。

その他にもアルベルト・ジャコメッティ（Alberto Giacometti 1901－1966 瑞），ベン・ニコルソン（Benjyamin Lauder Nicholson 1894－1982 英）の影響があると調査の中で高宮画廊社長の高宮剛一氏に伺った。今後調査を深めて行きたい。

### (7) 高宮秀閣

1972年の山木美術三人展での高宮秀閣との出会いは，内藤にとって重要な出来事だといえよう。1973年から1981年を契約作家として過ごす中で内藤は自身の代表的な作品を生み出してきたといえる。毎月決まった作品数を納める義務を持つことで，レリーフや小品，ドローイングなどの作風の広がりにもつながったと思われる。

### (8) 番浦有爾

番浦は，1993年第57回新制作展図録に内藤の追悼文を寄せている。

「内藤さんは，私より10歳年上の兄貴分であった。どこが気が合うのか，会うたびによく飲んだ。武生のお宅へも何度が，寄せて頂いた。木の香りのする仕事場で朝まで呑んだこともあった。…「朝一番にコップで呑むと五臓六腑に染みわたって，又これが旨いんだ」と云ったりしておられたのだが…最初に入院されたと聞いたのは，もう7～８年も前のことであった。少し良くなって家に戻ってこられたのときもあったが，又入院と云うように病院を出たり，入ったりされていた。…中略…仕事の出来なかった８

年間。辛かったであろう。悔しかったであろう。内藤さん安らかに眠って下さい。心からご冥福を祈ります。」[23]

朋友番浦が内藤を偲ぶ思いが伝わってくる。

番浦は，内藤が新制作展で受賞し，新会員や大阪での個展など活躍する様子を間近で応援してきた近しい友人であったのだろう。

**(9) 交流の深いその他の人物**

他にも加藤昭男，菊池一雄，小野忠弘らの作家も内藤と交流が深かったと思われる。また，中村セイ（なかむらせい1943－1997　福井）は，内藤堯雄に1970年に師事し，1975年には内藤と同じ新制作展に出品し，受賞を重ね1990年には会員になっている。

また，本研究の聞き取り調査に協力頂いた高宮剛一氏，芹川貞夫氏，髭分真二氏も内藤との交流が深い人物である。

高宮画廊高宮剛一氏は，先代秀閣氏の元で画廊の仕事をする上でも内藤と関わりがあっただろう。秀閣氏から画廊と共に内藤作品も引き継ぎその価値を伝えてきた人物である。

福井の画廊アートハウスギャラリーの髭分真二氏は，1989年以降の内藤の作品出品に関わっており，交流が深かったと思われる。

福井県立美術館の芹川貞夫氏は，県立美術館の内藤作品の収蔵や，「郷土の作家たち展」開催に向けてのやり取りなどで関わりが深かったという。

彼らは，内藤作品の価値を知る良き理解者である。

## X　成果・課題

ここまで，収集資料の整理，発表を中心にまとめてきた。内藤堯雄の基礎資料として生かされれば幸いである。

作品展を公募展，大阪中心の活動，福井中心の活動と分けることで，大まかな作風の変化や内藤の立ち位置の違いが見えてきたように感じている。

こうした基礎資料を基に，内藤をはじめとする日本の具象木彫表現の魅力の秘密に近づいて行きたいと考える。

資料整理にあたっては，新聞記事や展覧会案内，DMなどで事実を確認することに努めたつもりである。しかし，推測に頼らざるを得ない部分もあり課題が残された。特に，新制作展出品の作品の内５作品が特定できていないことが悔やまれる。

引き続き，関係者への聞き取り調査や新聞記事等の新たな資料の発見に努めて行きたい。

また，ドローイング作品の資料提示，分析も行うことができなかった。

今後の目標としては，写真等で把握できている作品等を整理し，レゾネ（全作品リスト）の取りまとめに取り組みたいと考えている。

その他にも，現在取り組んでいる，新制作協会の図録や目録，貴重資料の整理，調査についても別稿にて今後発表する予定である。

## おわりに

本論のおわりに，菊池一雄の内藤評と内藤自身の言葉を引用する。

「遠く中央から離れ，世間の風潮にとまどうこともなく，独りでただひたすらに人間性を求めて刻まれた彼の作品には，彫刻本来の純粋性に支えられた清らかな根強さがあります。そこには到底学校教育などには求められない健康なしぶとさがあり，とかく才子の集まりと見られがちな新制作の中では，彼の作品が異彩を放っているのも当然のことなのでしょう。」[24]

菊池一雄の言葉からは，制作に取り組む内藤の姿や，独自の力強い表現の内藤作品が浮かび上がってくる。

「自分なりの視点で木を素材に人物をつくってきた。これからも淡々と仕事に励むだけだが，じょう舌さを削り取って，さらに木が語る世界を広げたい。」[25] これは，1989年９月，64歳の内藤の言葉である。この年内藤は，福井県文化芸術賞を，1986年には武生市文化功労者賞を受賞している。一貫した姿勢で自らの木刻を作り続けた彫刻家の，奔放で力強い生涯だったといえるだろう。

本研究は，2008年の番浦氏への聞き取り調査から始まり，七年目にして，ようやく基礎調査資料がまとまったところである。面識もなく作品も見たことが無かった筆者が内藤に関心を持つきっかけは，筆者の恩師である国画会特別会員の神戸武志（かんべたけし1982－　三重）の言葉，「新制作の彫刻では内藤堯雄の作品が良い」であった。その言葉を聞いたのは20年程前の筆者が学生の頃であった。現在は筆者も内藤と同じ新制作協会の会員として木彫作品を制作

し出品を続けている。直接会ったことは無いが，今は内藤堯雄をとても身近に感じている。

## 註

1) 奥様千恵さんへの聞き取り調査で確認した。
2) 愛宕山画廊個展案内年譜にて確認した 1975, 1977, 1979, 1980は個展開催はないと思われる。
3) 新制作展図録，番浦有爾「追悼　内藤さん」1993
4)「内藤堯雄の新作発表展リアリティ追求全体にほとばしる情念」朝日新聞1976年９月１日
5) 菊池一雄「内藤堯雄彫刻展」案内, 1980, 福井市民福祉会館
6) 小野忠弘は，福井県出身の現代美術作家
7) 富田惣七（とみたそうしち　　-　　福井）
8) 「アトリエ訪問 新制作協会 内藤堯男」福井新聞, 1960年９月１日
9) 同上
10)「現代彫刻三人展」案内, 1972, 山木美術
11) 同上
12) 高宮秀閣「ごあいさつ」木彫レリーフ内藤堯雄個展, 1973. 高宮画廊, 大阪
13) 峰屋邦夫訳註, 老子, 岩波文庫, 2008, P34
14) 橿尾正次「ふくい時評　郷土の作家たち展」福井新聞, 1992年７月15日
15) 神門四郎「内藤堯雄彫刻展案内」1980, 福井市民福祉会館
16) 「原始的な生命感漂う木彫など力作16点内藤さん（武生）が福井で個展」1989年９月24日，日刊福井
17) 芹川貞夫「郷土の作家たち展」によせて, 1992
18) 同上
19)
20) 雨田光平「内藤堯雄彫刻展案内」1980, 福井市民福祉会館
21) 津田幸男「展１」1991
22) 福井県立美術館，芹川氏より聞き取り調査。
23) 1993年第57回新制作展図録掲載，
　番浦有爾「追悼　内藤さん」
24) 菊池一雄「内藤堯雄木刻展案内」愛宕山画廊, 1981
25)「木肌に不思議な生命感」福井新聞, 1989年９月28日

## 図版出典

図１, 芸術新潮，2004年９月号，新潮社，2004年９月
図２, 木喰展図録，神戸新聞社，2007年
図３, 新海竹蔵・峯田敏郎彫刻展図録，秋田市立千秋美術館，1993年
図４, 橋本平八と円空図録，三重県立美術館，1985年
図５, 桜井祐一作品集，現代彫刻センター，1979年
図６, 11, 14, 31, 32, 35, 36, 37, 50, 53, 54, 65, 73, 92,「郷土の作家たち展」図録，1992，福井県立美術館
図７, 8, 24, 52, 61, 79, 81, 82, 83, 84, 94, 96, 98 筆者撮影
図９,「入賞を親子で大喜び」読売新聞？, 1969年９月26日？
図10, 76, 77,「内藤堯雄の世界」図録，越前市武生公会堂記念館，2009
図12, 13, 15, 16, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 25, 29, 30, 33, 40, 42, 74, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 93, 内藤堯雄撮影（生家借用写真）
図18, 27, 28, 新制作展ポストカード
図26, 34, 38, 39, 新制作展図録
図41, ２周年記念・三人展DM，ギャラリー風，1997
図43,《現代彫刻三人展》パンフレット (1972)
図44, 現代彫刻三人展ポストカード
図45,46,《第２回現代彫刻三人展》案内 (1973)
図47, 48, 91, 木彫レリーフ内藤堯雄個展図録，1973
図49, 福井新聞1974年５月９日
図51, 福井新聞1976年９月２日
図55, 56, 57, 58,「内藤堯雄彫刻展」案内, 1980, 福井市民福祉会館
図59, 内藤堯雄彫刻展案内, 福井銀行大阪支店, 1981
図60,「内藤堯雄木刻展案内」愛宕山画廊, 1981
図62. 63,「油彩による素描画展案内」アートハウスギャラリー, 1988
図64,「内藤堯雄の木刻展案内」アートハウスギャラリー, 1989
図66,「小野忠弘，富田惣七・内藤堯雄展案内」アートハウスギャラリー, 1990
図67,「VIVA福井 馬越祐一とその周辺展案内」アートハウスギャラリー, 1990
図68,「津田幸男・内藤堯雄二人展」DM，福井県立美術館，1990
図69,「内藤堯雄「童」展DM」アートハウスギャラリー, 1991
図70.「内藤堯雄「童」展ポストカード」アートハウスギャラリー, 1991
図71,「内藤堯雄・了一展DM」アートハウスギャラリー, 1992
図72,「津田幸男・内藤堯雄二人展」案内，福井県立美術館，1992
図78,「彫刻家 内藤堯雄・河西栄二 作品展」岐阜大学旧早野邸セミナーハウス, 2014
図80,「アトリエ訪問 新制作協会 内藤堯男」福井新聞, 1960年９月１日
図95,
図97,「ふくい時評　郷土の作家たち展」福井新聞, 1992年７月15日

## 謝辞

本研究にあたり，番浦有爾氏，高宮剛一氏，芹川貞夫氏，髭分真二氏，小林博之氏，藤野屋文具店様，内藤了一氏，内藤千恵氏には，多大なる協力と御教示をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。